のんた

17

山口の土地改良

vol.17
Autumn 2015

21世紀の食料・環境・ふるさとを考えよう！

◉巻頭特集〈寄稿〉
百年千年、百個千個
～やまぐちの「農の偉業」探訪～

入選おめでとう!!
「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展2014

入選作品のご紹介
第16回食料・環境・ふるさと写真コンテスト

◉特集Ⅱ
「食料・農業・農村基本計画」6つのポイント

食料・環境・ふるさとを考える
山口県地球人会議

◉巻頭特集〈寄稿〉

百年千年、百個千個
～やまぐちの「農の偉業」探訪～

ライター　石井里津子

日本全国の農村を取材するようになって、約20年が経つ。その間、山口県の農村にも少しずつ出会ってきた。あまり声高に語られはしないが、やまぐちには、百年千年の営みの蓄積である「農の偉業」がいくつもある。それらは、ひっそりと佇み、日常の風景のなかに溶け込んでいる。だが、その偉業を紐解くと驚きの連続だ。

そんな、やまぐちの風土が生んだ営みを今一度見てみよう。そこには、変わりゆくものと変わらないものがある。わたしたちはこの2つの力をうまく操らねばならない時代に生きている。そのベクトルの力加減を間違えば、百年千年分の営みの蓄えを潰してしまうことにもなりかねない。

さあ、やまぐちの農村へ。百年千年、百個千個――ここには、そんな桁違いの話がある。

山手から久賀の町を見下ろす。8月のみかん畑は、袋をみかんにかぶせてもいた

千を超える周防大島の水洞と横穴

瀬戸内海に浮かぶ金魚の形をした島、周防大島。ここに巨大な石積みの偉業がある。旧久賀町にある「水洞」と「横穴」だ。これらは、棚田を潤すための暗渠なのだが、ここではそれらのほとんどが高い石積み技術を誇る。そして造られた取水口の数、旧久賀町だけで約1、400個（＊1）。千を超える驚きの数は日本最多。人口が増加した江戸後期から明治にかけて、標高550メートル辺りまで石積み棚田が島の北東側一帯に拓かれた。と同時に水洞や横穴も随所に築造され、ここに優れた石積み文化が花開いた。今、その棚田の多くは、みかん畑へと転換し、石積みの多くも木々の中で、一望できない。

久賀の西部に位置する庄地の水洞

さて、「横穴」は、ほかの地域では「横井戸」ともいう。かつて1998（平成10）年、周防大島へ棚田の実態調査で訪れたとき、久賀町ではないが、実際に横穴を掘った経験を地元古老から聞く機会があった。父親が山をトンネルのように奥へと掘り進め、子どもの自分は穴の中から土を運び出したという。海から拾ってきた貝殻に油を入れ、そこに紐を入れて火を灯し、明るくしたのだとか。そして、水脈にあたるまで掘り進んだ。

そして、より大規模な石積みの暗渠が「水洞」である。類似したものが大阪能勢にあるというが、ここまで大規模に展開している場所はほかに聞かない。水洞は、谷川の上に石を組むことによって、耕地と水路の両方を確保したもの。まさに、石の技術の結晶。谷川に石で蓋をして、その上に土を盛り、農地を拡げている。最も大きい水洞は、旧久賀町畑能庄にあり、長さ約600メートル。この間に農地（かつては棚田）が38段あるのだという。

久賀の石積み棚田の中へ足を踏み入れてみる。斜面は急で、石積みの高さは人の背よりも高い。大きめの石が地面に対し垂直に近い形で組んである。取水口は人が腰をかがめて入れるほどの大きさのものもある。奥をのぞくと、水洞の中にも上の棚田を支える石垣が組んであるためか、1段ごとに行き止まりのように見えた。

資料で確かめると、田んぼに入れる水は、水洞の中にある石垣の中段に「竹や棕櫚（しゅろ）、槍をUやVの字型にくりぬいた樋」をかけることで導水している。こうした「水洞」や石積みの「横穴」は、周防大島のなかでも旧久賀町に集中しているという。なぜか――。

畑能庄の水洞は、集落のなか民家の下も通っていた

水洞の取水口

そこには「久賀の石工」と言われた地元の人々の存在があった。周防大島出身の、日本が誇る民俗学者、宮本常一は、地形や地名からこの地で中世に砂鉄掘りが行われ、その技術が生かされたのではないかと推考している。『山口縣久賀町誌』（昭和29年）（宮本常一が編集監修）には、これらの技術はすでに元禄の頃（1688～1704年）、港の潮留めの石垣を中心に行われるようになったとある。そして、久賀の棚田と石工についてこう記述している。

「久賀町の背後平地より山の中腹に至る美事な棚田は全くこの亀の甲積によって行われて居り、それは久賀町の一つの偉観でさえある。このような技術が幕末から明治にかけて、中国地方西部・北九州山間の村々を畠から水田稲作にきりかえてゆく。

土工（石工）たちは四～五人でくんで、正月すぎから五月頃までそれぞれ仕事に出かけてゆく。山口県下一帯、北九州にかけてである」

久賀の石積みをはじめ、全国の石積みの農地には、「魂」とでも言うべき、「思い」が刻まれている。その驚異的な労働力と執念がまるでそこに今も残り、わたしたちに多くを語りかけてくる。人は自分のためだけに、こんな驚異的なものを造ったりはしない。こんなに頑張れない。子や孫のため、この地が未来永劫続くよう、ここでみんなが生きていけるよう……深い祈りにも似た一念で築かれている。

石積み棚田の風景は、わかりやすくこのメッセージを伝えてくれる。石積み風

景に限らず、農村風景はどこも、その地で生きていくための願いそのものを具現化している。こうした過去からの縦軸が農地にあると気づけば、自分がその延長線上の末裔であることがつかめ、農地が違って見えはじめる。

久賀にはかつて圧巻の棚田景観があった。そして今、周防大島は県内のみかん生産量の9割近くを占め、「みかんの島」として知られている。戦後、棚田は急速にみかん畑に切り替わった。そのみかん畑も昭和後半、時代の波に押され、現在では高齢化のなか、島の急斜面での重労働も相まって、その面積を減らしてきた。

今、島の樹園地の面積は約600ヘクタール。最盛期の4分の1を切った。高齢化率も高い。だが、周防大島には島の風土に魅せられた移住者も増えはじめた。6次産業で島の豊富な柑橘類を生かしたジャム屋も全国で評判を博し、若手の就農者も増えている。次の時代の豊かさが、ローカル地点から創られはじめている。

石積みの技術は巧妙で、法面を歩くための足場が見事に組み込まれている

見島の百個もの三角ため池

次は、日本海を北西へ高速船で70分ほど渡った見島（萩市）の話である。見島は「牛の形」と言われるが、見島牛でも知られたところだ。

10年余前、はじめて見島に向かった際、意気揚々と船の前頭部分の席に座ったこれがいけなかった。ひどい船酔いに苦しめられることになる。最も船酔いをする席に座ってしまったのである。あとから地元の人に教えてもらった。「船底にある座敷の一番後ろで、横になって寝ているんです」と。

見島は、朝鮮半島に近く、大陸貿易や海防の要所として古くから栄えてきた島には、7世紀の防人の墓も漂流者の墓も、鯨の塚もあり、古来脈々といのちをつないできた島だ。

周囲18キロメートルと大きくはない1、000人ほどが暮らすというが、昭和30年代には3、000人を超える人がいた。そして、1716（享保元）年の記録ですでに人口は、1、627人。江戸初期に、これだけの人を食べさせることができた島である。

なだらかな島の山にはすべて、棚田（地元では「段飾りの田んぼ」と呼ぶ）が切り拓かれ、島の南東に一箇所、海に面して広がる不思議な平坦地の田園地帯がある。小さな島で、これだけの平坦地があるのはめずらしい。しかも地名は「八町八反（はっちょうはったん）」。8・8ヘクタールの意味だ。実際は12ヘクタールほどあるそうだが、かつては海で埋め立てられたと語りつがれている。

1739（天文4）年の「見嶋郡絵図」にはこの地が田んぼとして描かれ、約120年後の1856（安政3）年の絵図には「八町八反」という文字がはっきりとある。だが、干拓の記録も逸話もなく、謎は残るままだ。

宮本常一は1960～62（昭和35～37）年に見島も踏査している。その中で八町八反の辺りを指し「もと入江になっていたものと思われるが、（中略）そのうち地震、台風などの影響によって入江の口の砂洲が入江をふさいでしまうようになり、砂洲の内側は水田として開かれ、漁民は現在の浦へ移動してきたのではなかろうか」と推測している。

見島には高い山も、大きな川もない。そして八町八反には、水路がない。水はいったいどこからくるのであろう。田んぼのなかに足を踏み入れて、田んぼの様相が今まで見たこともない風景であることに驚く。そこら中に小さなため池があるのだ。360度、ぐるりと目に飛び込むだけでも10個は数えられる。

小さく、深い。しかもその池の内側は、浜から拾ってきたことがわかる丸い石で固められ、独特の景観を作っている。しかも、この小さなため池はどれも三角形。水面は、当然田んぼよりもずっと低い。どうやって水を田に入れるのだろう。八町八反で耕作する人に話を聞いた。

「今は、ポンプでここから汲み上げますけど、昔は人力です。夫婦2人で水を汲み出すんです。水汲み桶の両方に縄をつけて、こっちとそっちで引っ張りながら、池から水をかきだすように汲み上げる。だから、水を田んぼに入れやすいように池に角を造ってある。ほら、どの池も三角でしょう」（2004（平成16）年採録）

どれもこれも三角。角が3つ。そのどれもが湧き出る地下水と天水を溜めているため、水は濁らず、青緑に澄み切っている。子どもたちは、親が働いている傍らこの池で泳いで遊んだと聞いた。

最近の八町八反の写真。山口県萩市提供

百年千年、百個千個
～やまぐちの「農の偉業」探訪～

見島、八町八反の三角のため池。
池の側面をぐるりと固めた丸い石は白く、
青く透き通る水が映えていた

ちなみに、八町八反の田んぼ1枚の大きさは、1～2反（10～20アール）程度。1枚に付き1個、必ずため池があるという。2004（平成16）年当時、30戸の農家がここを耕し、1軒で4～5個のため池を持っているというから、八町八反には、百個とはいわず、120個、ともすれば150個ものため池があるようだった。

今以て、見島以外で三角の小さなため池がいくつもある風景を見たことがない。現在も八町八反は耕作され、ため池は健在だと聞く。近々、見島へ行って、三角ため池を確かめてこよう。今度は、船底で横になりながら、向かうのだ。

千を超える向津具（むかつく）半島のため池群と棚田

向津具半島にもその数、千を超えるため池群がある。本州最北西部、日本海に向けて鳥がぐいっと首を突き出したような形の半島、それが向津具半島だ。旧油谷（ゆや）町（現長門市）にあたる。

この半島は基部に至るまで、海岸を望むように棚田がその丘陵地一帯に約600ヘクタール拓かれている。なかでも東後畑（ひがしごばた）地区は「日本の棚田百選」の一つに認定され、知名度も上がってきた。認定エリア7ヘクタールだけで210枚の棚田があるというから、600ヘクタールだといったい何枚、棚田があるのか万単位の数字が出てきそうである。

向津具半島東後畑の棚田とため池、冬は日本海から北西風が吹きつける

東後畑営農組合代表の三村建治さん

地元、東後畑営農組合代表の三村建治さんは話す。

「開田の歴史を調べてみても、史料に何一つ残されていないんですよ。ただ、長州毛利の隠し田だったと言い伝えられています。これだけのため池と田んぼを造成するのには、大きな資本と大勢の人が動いているのは確かです」

旧油谷町は、向津具半島の基部までを占めているが、1987（昭和62）年に町のため池総数は1、787か所。うち9割近くが向津具半島エリアに集中している。当時、このエリアの水田面積は約1、005ヘクタール（＊2）。そして2010（平成22）年、ため池総数は1、412か所。田・耕地面積784ヘクタール、ちなみに農家戸数は649戸（＊3）。農家戸数よりも圧倒的にため池の数が多い。

現在、戸数33戸の東後畑集落に絞って見ても、もともと約50ヘクタールの耕地のうち耕作中の24ヘクタールに対し、ため池は小さなものも含めると約100個あるとか。三村さんは言う。

「旧油谷町のため池のほぼ9割が個人用の小さなため池です。旧町内で1ヘクタールを超える大きなため池は3つばかりで、その一つ、東後畑集落の『大堤（おおづつみ）』は1・5ヘクタールほど。深さは5～6メートル。かつて最も多いときで50人が利用していたけれど、今じゃ個人6人と営農組合だけですよ。

わたし自身は、田んぼ約2・7ヘクタールで8つのため池を管理しています。これは多い方です。この辺りの農家は最低でも2つ3つ管理するのが普通ですね」

そして、ため池が老朽化し、漏水等がはじまると、その水がかりの田んぼは必然的に荒れていく。今、日本の棚田百選の認定エリアのうち3分の1が荒れてきたという。だが、地元では営農組合を発足させ、耕作放棄された棚田を請け負い、米を作り続けている。さらに最近、この地域に魅力を感じて移住し農業をはじめる若い人も出てきた。そして、県内の大学生たちも手伝いにやってくるようになった。

下関市立大学の学生たちが作成した向津具半島を案内する看板

2月上旬、向津具半島の「庚申塚」に飾られた「さるを」。一緒に細い竹の先に御幣がつけてあるのは、「地神祭り」用のもの。「さるをうち」とは別の行事のものだが、近年はこの2つの行事をまとめて行うところも増えたという。三村さんのところは伝統行事を残す意識が強く、地神祭りは2月後半に別途行う

2015（平成27）年2月、ため池のそばに建つ石碑には、しめ縄がまかれ、白い御幣がはためいていた。よく見ると、ほかに細い竹筒と不思議な形のわら細工が下げられている。

三村さんにたずねてみると、「2月のはじめ、庚申塚に『さるを』を供える行事」とのことだった。「猿尾」と漢字では書くそうだが、これは、わらで編まれた民具の名称である。

「ここでは、昭和38年頃まで牛に鋤を引かせていたんですよ。牛に引かせる横棒と鋤とをつなぐのが『さるを』。1月2月に、お供え用の『さるを』と一緒に自分の家で一年分使う『さるを』も集まって作る。これを『さるをうち』ゆうんです。お供え用は実際に使うものより大きめに作る。各家5～6本は必要だったから、6軒あったらその6軒分をまとめてみんなで作って帰っていました」

集落内の、近所の小さなまとまりが一単位となり、今もみんなで祭事の「さるを」をうつ。わらを3つ編みするから最低4人は必要で、4人集まらなくなったら、この行事もできなくなるという。

「行事は残さんと集落が荒れるんですよ。こうした行事は農業をやるもんの原点。昔から水の喧嘩、道の喧嘩があっても行事の日には来る。そして行事のあとは酒を交わす。こうした場が作れないと、許容範囲が狭くなって荒れていくんです」

集落が荒れれば、田んぼも荒れる。千を超えるため池の維持は、農村コミュニティの維持と深くつながっている。伝統文化が果たす役割は、風土の奥深くで互いをつなぎあわせる地下茎のようなものだ。風土とともに生きる人にだけ与えられた特別な進化のように、見えない「根」を人々は持つ。伝統文化を介し、その根で人は人とつながり、自然とつながり、先人とつながっている。やまぐちの農村では、こうした日本人の精神の原点が日常の中にまだ、織り込まれている。

＊

水と土の物語は、百年千年、人がいのちをつなごうと労力を投じ、百個千個と驚異の偉業を成し遂げてきた物語である。わたしたちがこれまで、どうやっていのちをつないできたのか、それを知りうる物語だ。未来へいのちをつなごうと農地を拓き、水を届けた執念のような「希望」を農地は今も語っている。

百個千個――それは簡単に生まれる数ではない。だから、農地へ足を運んでほしい。目先を超えた何かが見えてくるはずだ。そして、わたしたちは考える。これからどう生きていけばいいのか。自分たちのベクトルはどこへ向かうのか。

その答えは、農の偉業と今の風が教えてくれるだろう。

（＊1）久賀　八幡生涯学習のむら製作パネルより
（＊2）『油谷町史』平成2年より
（＊3）山口県の農林業（農林業センサス）等をもとに県農村整備課より

向津具半島の集落は、棚田と山の中に石州瓦の朱い屋根が映え、美しかった

■参考・引用文献：
『山口縣久賀町誌』（1951）編著：久賀町誌編集委員会
『民衆の知恵を訪ねて』（1963）宮本常一　未来社
『周防久賀の諸職　石工等諸職調査報告書Ⅱ』（1981）久賀町教育委員会
『日本の棚田』（1999）中島峰広　古今書院
『宮本常一著作集17　宝島民俗誌・見島の漁村』（1974）未来社
『油谷町史』（1990）油谷町史編纂委員会
『新 田舎人』全国土地改良事業団体連合会発行38号（2004）（おじゃま島っす⑥　山口県萩市見島）／『棚田ライステラス』全国棚田（千枚田）連絡協議会発行64号（2013）（山口県長門市油谷の棚田と大学生）／『土地改良』（一社）土地改良建設協会発行289号（2015）（忘れられた大地の物語を求めて　向津具半島）の取材執筆記事を元に加筆修正

執筆者プロフィール／いしい・りつこ。佐賀県生まれ、香川県育ち。現在山口県下関市在住。香川大学卒業後、上京し出版社勤務を経て埼玉大学（卒）に編入。以後、全国の農村に出向き取材執筆等を行う。『棚田はエライ』編著。

Congratulations!!

入選おめでとう!!「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展2014

主催:全国水土里ネット・都道府県水土里ネット

日本の農業・農村は、私たちの暮らしに欠かすことのできない米や野菜を生産していく場としての役割を果たすとともに、自然環境を守り多様な生き物を育む場としての役割も担い、さらには洪水を防いだり大気や水質の浄化をするなど多面的な機能ももっています。また、農村の豊かな自然や美しい風景、歴史的な遺産や伝統などは私たちの貴重な文化であるとともに、未来を担う子どもたちの豊かな感性を育てるかけがえのない財産でもあります。

「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展は、それら貴重な財産を次世代へと引き継いでいくため、子どもたちに「田んぼ」「ため池」「農業用水路」などの風景や大切な水路を守っている人たちの姿を通して水の循環や環境保全への理解をうながし、大人たちへのメッセージとして子どもたちのまなざしを届けることを目的として開催されています。

この絵画展の応募資格は小学生以下で、今年は「新発見！ぼくのわたしのふるさと」をテーマに全国各地から8、359点の応募がありました。山口県からは2名の方が入選しました。おめでとうございます。その作品をご紹介します。

水土里ネット山口 会長賞

「あきかんをつかってがんばるぞ。」

長門市立日置小学校1年（当時）
松﨑幸弘（まつざきゆきひろ）さん

入選

「田植え体験」

美祢市立大田小学校6年（当時）
村田結菜（むらたゆいな）さん

第16回

食料・環境「水・土・人・くらし」ふるさと写真コンテスト

一般の部

入賞作品のご紹介

山口県内の農山漁村の良さを再発見していただこうと「水・土・人・くらし」をテーマに、平成11年度から始まった『食料・環境・ふるさと写真コンテスト』。16回目を迎える今年度は、9月から12月にかけて募集を行ない、県下各地から農山漁村の風景や生き物、人々の営み、伝統文化、などを撮った410点の作品の応募がありました。

すばらしい自然や文化が数多く残る農山漁村は、まさに私たちの、そして生き物たちの心通うかけがえのないやすらぎの地、次世代に残していきたい宝です入賞作品23点をご紹介します。

山口県知事賞

『満開の桜の下で』 山口市阿東徳佐

尾崎ヒサ子（防府市）

桜が田に写り込んで美しい日本の原風景のようでした。

山口県地球人会議会長賞

『里山のめぐみ』 山口市阿東徳佐

吉田勝三（下松市）

オレンジ色のすだれだろうか。近くに住む農家の人たちの手作業により、ひもに吊るされた柿。天日にさらされ、寒い北風が吹き、飴色に変わるころには更に甘みが増して12月中旬、店頭にならぶ。

16th Furusato photography contest

水土里ネット山口会長賞

『防除作業』 山口市阿東篠生

井上　守（防府市）

今年は天候不順でウンカが大発生とのこと。防除ヘリを使っての予防作業中の様子を撮らせて頂きました。

中國新聞防長本社賞

『収穫の頃』 周南市中須北

内山和則（周南市）

今年も収穫の時が来ました。「はぜ掛け」が続いています。デザイン、パターン、カラーとも素敵な棚田の秋の風景です。

山口新聞社賞

『大漁ダー!!』 下関市豊北町

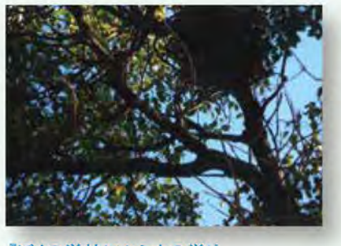
村田利子（宇部市）

阿川漁協のセリ市に出掛けた時のひとこまです。

入　選

『林の中の光』
長門市向津具・林の中
長門市立向津具小学校縦割り班2班
（長門市）

上を見たらかがやいていたから撮りました。



『ぼくの学校にからすの巣!』
周南市
渡邊巧真（周南市・小学5年）

カラスの巣を見つけたよ。

『さざんか』
周南市
濱田穂乃叶（周南市・小学5年）

とってもきれいな花。

児童・生徒の部

山口県地球人会議会長賞
『向津具の緑と青』長門市向津具の棚田
長門市立向津具小学校縦割り班3班（長門市）

山と山の間に海が見えてきれいだし、心がおちつきます。

優 秀 賞
『おこめがおいしくなるね』
周南市
三浦沙紀（下松市・小学1年）

おこめをほしたらすごくおいしくなります。

優 秀 賞
『ため池一面にさく　たくさんの花』
平生町佐賀
米田悠乃（平生町・小学４年）

ため池に花がいっぱいさいていてきれいでした。佐賀のシンボルである風車といっしょにとりました。

優 秀 賞
『大好きな公園』
宇部市・少童神社
師井和奏（宇部市・小学５年）

大好きな公園（家の近く）がとってもきれいだったので、とりたいと思いました。

主　催／　食料・環境・ふるさとを考える山口県地球人会議
　　山口県・水土里ネット山口
後　援／　山口新聞社・中國新聞防長本社

一般の部

16th Furusato photography contest

『田植えのころ』下関市菊川町
政村　茂（下関市）

父親が田植えをしているその後で、子供さんが無邪気に遊んでいる。なんとも言えない。田んぼに写り込んでいる姿も入れて撮りました。

『夏越祭神事』下関市・彦島大橋より
藤井國夫（下関市）

彦島八幡宮の夏越祭で行われる海上渡航は、地元の漁業にかかわる人たちの協力を得て、厳しい夏をのりきる為、毎年斎行される郷土の祭です。

『荒磯に生きる女』下関市角島
内平和子（宇部市）

大荒れの日、波を撮影に行きましたところ、打上げられたワカメを拾う人に出会いました。何枚か撮らせていただいた１枚です。

『どろんこ田植えの子供』下関市菊川町
河野サエ子（下関市）

田植え体験の真最中。どろんこになってはしゃぐ子供たち。かん高い笑い声が里山に響き渡りました。

『おんな神輿　現る!』山口市徳地船路・船路八幡宮
池田大乗（山口市）

自宅近くの船路八幡宮の秋季大祭に出かけると、今年は初めて"おんな神輿"が登場していました。従来は子ども神輿が行われていましたが、御多分にもれず少子化の波に・・・。そこで世話役さんたちの努力で女性に出番が回って来たといいます。折しも安倍首相肝煎の女性活躍元年。おおいに祭は盛り上がり、神主さんも男神輿もタジタジ・・・。

『棚田を守る』周南市中須
奥永　收（平生町）

棚田は作業効率の悪いところ。おじいちゃんの手伝いで田植えをしているところを写した。

『楽しいアイガモ放鳥』下関市菊川町
野村ミツ子（下関市）

アイガモ農法の田んぼに園児たちがひなを放し、はじめての体験に大喜び。子供たちの表情にふるさとのぬくもりを感じました。

『弥栄湖畔のホタル』岩国市弥栄湖畔さざなみ公園
坂本　剛（岩国市）

広島県境、山口県一級河川小瀬川に建設された弥栄湖畔「さざなみ公園」のホタルの乱舞が湖面に映り夏の彩。綺麗だった!!

『収穫を終えて』山口市宮野
重村哲雄（山口市）

収穫を終えた圃場を耕しているところへ、餌を求めてシラサギが来ていましたが、SLの音に驚いて飛び立った瞬間を撮りました。

『海への祈り』下松市笠戸島
有吉　昇（長門市）

干あがった海中の御旅所に置かれた神輿の前で、一人の神主が海の安全と豊漁を祈願していました。

『雪化粧』山口市阿東徳佐
岡本公一（山口市）

山口市阿東徳佐です。今頃は子供も少なく、柿を食べる人も少なくなりました。柿木がさびしそうでした。眠っている田も春には頑張ってくれる事でしょう。

◉特集Ⅱ

「食料・農業・農村基本計画」6つのポイント

政府が中長期的に取り組むべき方針を定めた「食料・農業・農村基本計画」が平成27年3月、新たに閣議決定されました。そのポイントについて紹介します。

若者たちが希望を持てる「強い農業」と「美しく活力ある農村」へ

進む超高齢社会、人口減少、農地の荒廃…。一方では、創意工夫を発揮した6次産業化、海外輸出への挑戦、大規模経営の出現といった新たな動きもある日本の農業・農村。

新たな基本計画では、明るい展望を切り拓くには、新しい芽を大きく育て、農業・農村の潜在力を最大限発揮し、持続可能なものとしていく必要があるとして、「強い農業」と「美しく活力ある農村」をキーワードとしています。

農業の構造改革、国内外の新たな需要の取り込みなどを通じて農業や食品産業の成長産業化を促進する〝産業政策〟と構造改革を後押ししつつ、農業・農村の多面的機能の発揮を促進する〝地域政策〟を車の両輪として農政改革を推進していくとしています。

ポイント1 実現可能な食料自給率目標の設定と、食料自給力指標の公表

世界の人口は増え続け、世界の食料需要は2050年には2000年の1、6倍まで増加する見通しとなっています。

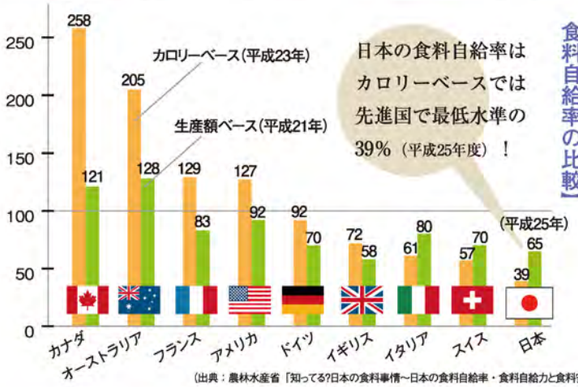
しかし、国際的な食料事情は、干ばつなどの大規模自然災害や異常気象などによって、穀物などの生産量が大きく減少する可能性があります。

日本は今、世界第一位の農産物の純輸入国です。食料自給率はカロリーベースで39％、生産額ベースで65％。先進国で最低水準です。世界の食料需給に不安定要素がある中、多くの国民が将来の食料供給に不安を持っています。

そうした中、新たな基本計画では、平成37年度の食料自給率をカロリーベースで45％、生産額ベースで73％に高める目標が掲げられました。

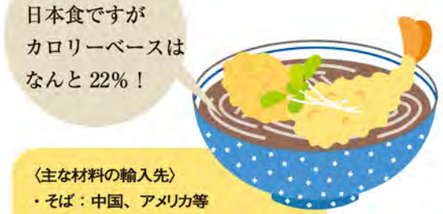
この目標は、従来の高い目標とは異なり、「計画期間内の実現可能性を重視」して設定されたものです。さらに「食料自給力指標」を初めて示し、食料安全保障に関する国民的な議論を深め、食料の安定供給の確保に向けた取組を推進します。

【我が国と諸外国の食料自給率の比較】



（出典：農林水産省「知ってる?日本の食料事情～日本の食料自給率・食料自給力と食料安全保障～」）

【私達の食卓における自給率】



〈主な材料の輸入先〉
- そば：中国、アメリカ等
- えび：タイ、ベトナム、インドネシア等
- 小麦（衣）：アメリカ、カナダ等
- 菜種（油）：カナダ等

（出典：農林水産省「知ってる?日本の食料事情～日本の食料自給率・食料自給力と食料安全保障～」）

農林水産省が提唱している 食料自給率アップのための5つのアクション

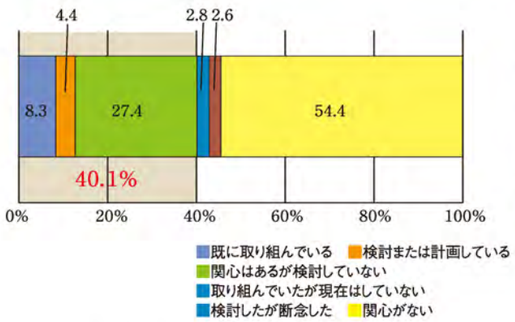
1. 「いまが旬」の食べ物を選びましょう！
2. 地元でとれる食材を日々の食事に活かしましょう！
3. ごはんを中心に、野菜をたっぷり使ったバランスのよい食事を心がけ、しっかり朝ごはんを食べましょう！
4. 食べ残しを減らしましょう！
5. 自給率向上を図るさまざまな取り組みを知り、試し、応援しましょう！

ポイント2 輸出拡大に向けた取組の強化と、6次産業化の促進

(1) 農林水産物・食品の輸出促進、食品産業のグローバル展開の促進

これまでの輸出促進の取組は、産地単位や都道府県単位の取組にとどまり、特定の国や時期に輸出が集中するなどの課題がありました。そこで今回の基本計画では、オールジャパンでの輸出促進体制を整備。また、「和食」に注目が高まる中、日本食や食文化の海外展開を促進。さらに国内外の市場において戦略的に知的財産を生み出し、経済的価値につなげ、模倣品・海賊版から守る取組を推進します。

【「海外展開」への取組み状況】

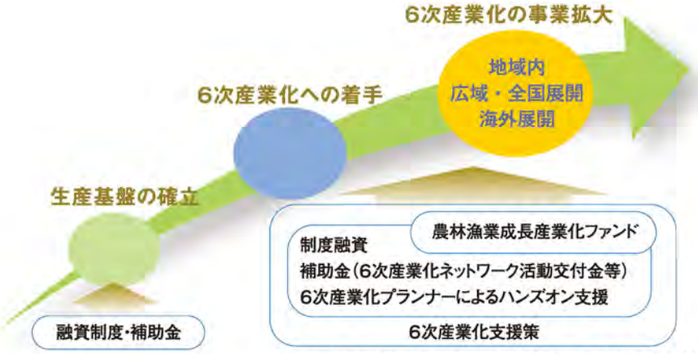


（出典：農林水産省「食料・農業・農村基本計画の概要～食料・農業・農村 これからの10年～」）

(2) 6次産業化の戦略的推進

農業者が明確な事業戦略のもとで主体的に取り組む6次産業化を進めることにより、フードバリューチェーンを構築します。

【6次産業化に関する経営の発展段階に応じた支援】



（出典：農林水産省「食料・農業・農村基本計画の概要～食料・農業・農村 これからの10年～」）

ちょっと教えて

A.Q. フードバリューチェーンって何？

農林水産物の生産から製造・加工、流通、消費に至る各段階の付加価値を高めながらつなぎ合わせることで付加価値の連鎖を作ること、産地の「こだわり」を消費者につなげていくこと。

A. Q. 6次化産業化などの支援施策は？

新たな価値の創出に成功した取組について成功の要因・課題を分析し、その結果をふまえた現場の取組を促進。6次産業化の取組などをコーディネートする人材を育成する取組、農業者などの適時・的確なサポート体制を充実化。地域ぐるみで推進するため、地域における連携の場などを設置し、地域の戦略などの策定を推進します。

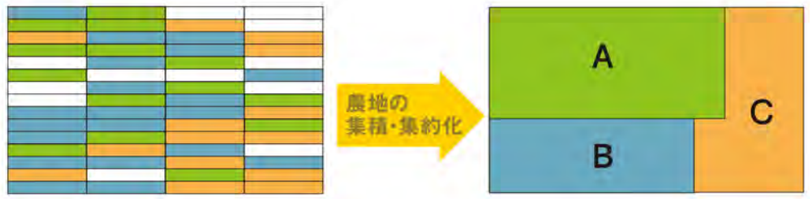
ポイント3 経営所得安定対策・農地中間管理機構・米政策改革

(1) 担い手の育成・確保、経営所得安定対策の推進

担い手に対し、経営所得安定対策などの支援を重点的に行います。また、法人運営には効率的・安定的な農業経営に向けてメリットが多いことから法人化を支援。法人化などを通じた経営発展、新規就農や人材の育成などを進めます。

(2) 担い手への農地集積・集約化と農地の確保

農地の公的な中間的受け皿として各都道府県に整備された農地中間管理機構をフル稼働させ、地域に分散する農地を借り受け、担い手への集積・集約化を推進。荒廃農地の発生防止・解消などを推進します。



（出典：農林水産省「食料・農業・農村基本計画の概要～食料・農業・農村 これからの10年～」）

(3) 米政策改革の推進、飼料用米等の戦略作物の生産拡大

米政策改革の推進により、行政による生産数量目標の配分に頼らない、需要に応じた生産を推進。また、水田をフルに活用し、食料自給率・食料自給力の維持向上を図るため、飼料用米・米粉用米・麦・大豆などの戦略作物の生産拡大を推進します。

ちょっと教えて

Q. 本計画でいう「担い手」とは？担い手への重点的な支援とは？

A. 担い手とは、認定農業者、将来認定農業者になることが見込まれる認定新規就農者、将来法人化して認定農業者となることも見込まれる集落営農。これらの経営体に経営所得安定対策、融資、税制などの支援が集中して行われます。

ポイント4 集約とネットワーク、地域政策の展開

(1) 多面的機能支払制度等の推進

家族農業経営や法人経営、地域住民なども含め、地域全体の共同作業により、地域資源の維持・継承を推進します（多面的機能支払制度）。また、生産条件が不利な中山間地域などにおける営農の継続に対する支援を行います（中山間地域等直接支払制度）。

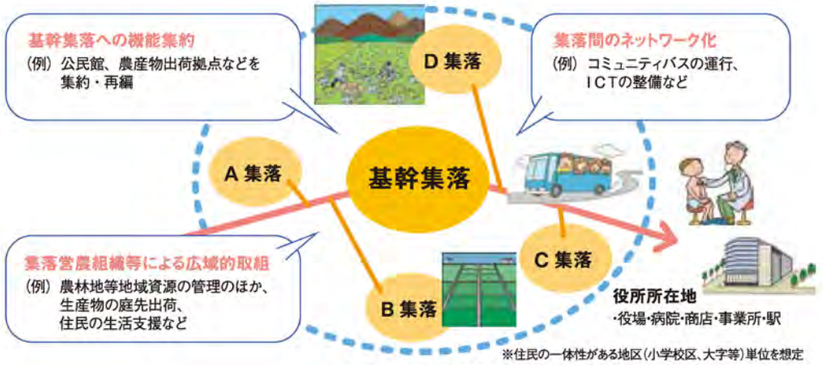
(2) 農村への移住・定住の促進、鳥獣被害への対応

観光・教育・福祉などと連携した都市農村交流を、宿泊・体験施設の整備や体験活動を支援する人材育成などを通じて推進。多様な人材の都市から農村への移住・定住も、相談支援の充実に向けた取組などを通して推進します。

また、鳥獣被害対策の体制を強化。捕獲した鳥獣の食肉利用など、地域資源としての有効活用などを推進します。

(3) 「集約とネットワーク化」による集落機能の維持

生活サービスの機能（例えば公民館や農産物出荷拠点）などを基幹集落に集約した「小さな拠点」と、交通網の整備（例えばコミュニティバスの運行）による周辺集落のネットワークの形成を推進します。



（出典：農林水産省「食料・農業・農村基本計画の概要～食料・農業・農村 これからの10年～」）

ちょっと教えて

A. Q. 多面的機能支払制度って何？

地域コミュニティによる農地法面の草刈り・水路の泥上げ・農道の路面維持などの基礎的な保全活動（農地維持支払）、水路・農道の軽微な補修・植栽による景観形成などといった質的向上を図る活動（資源向上支払）を支援するものです。

ポイント5 東日本大震災からの復旧・復興

被災した農業者の早期の経営再開に向け、農地などの着実な復旧などを推進します（除染後の農地などの保全管理や作付実証など）。また、原発事故に対応し、食品の安全を確保する取組や、風評被害の払拭に向けた取組などを進めます。

【津波被災農地における営農再開可能面積】

項目	被害状況	進捗状況（%）0 20 40 60 80 100	
農地（H27年1月末時点）	6県（青森・岩手・宮城・福島・茨城・千葉）の津波被災農地 → 21,480ha	70%（約15,060haで営農再開が可能）	岩手:62%（450ha） 宮城:84%（12,030ha） 福島:30%（1,630ha） その他:100%（950ha）
農業経営体（H26年2月1日時点）	津波被害のあった農業経営体（東北・関東6県）→ 約10,100経営体	55%（約5,610経営体が経営再開）	岩手:54%（260経営体） 宮城:65%（3,910経営体） 福島:24%（670経営体）

（出典：農林水産省「食料・農業・農村基本計画の概要～食料・農業・農村 これからの10年～」）

ポイント6 60年ぶりの農協改革と、農業委員会改革

意欲ある農業の担い手が活躍しやすい環境となるよう、農協・農業委員会の改革を行います。

【参考】
・農林水産省『食料・農業・農村基本計画の概要～食料・農業・農村 これからの10年～』平成27年4月
・農林水産省『知ってる？日本の食料事情～日本の食料自給率・食料自給力と食料安全保障～』平成27年4月
・農林水産省『食料・農業・農村基本計画』平成27年3月
※食料・農業・農村基本計画について詳しく知ろう！
農林水産省HP
http://www.maff.go.jp/j/keikaku/k_aratana/index.html

「食料・農業・農村基本計画」6つのポイント

のんた Photo Column vol.17

棚田って何だろう？

棚田は米を育てるだけでなく、私たちの暮らしや自然の生き物にとって大切な役割を果たしています。

ダムになる棚田

棚田には、ダムと同じように水を貯める機能があります。雨が降ると田んぼが水を蓄え、その水がゆっくりと地下に染みこんでいくので、一気に川に流れ込んだり、洪水やてっぽう水が起きるのを防いでいます。

棚田は水や空気をきれいにする

棚田には、水の汚れやばい菌を取り除いてきれいな水にするフィルター機能もあります。また、太陽に照らされて蒸発した水が気温の上昇を防ぎ、雲になって雨を降らせ、空気をきれいにしています。

地すべりを防ぐ棚田

多くの水を蓄えている棚田は、地すべりをおこしにくくなっています。また、稲作をするために山を切り開いて田んぼに変えたことで、山から下流へ水がゆっくり流れるようになって、土砂の流出を防いでいます。

生き物の宝庫、棚田

棚田とその周辺には、カエルやゲンゴロウ、トンボなど生き物がたくさん棲んでいます。山があり、きれいな水があるのでいろいろな種類の植物も自然の中でのびのびと育っています。

発行

食料・環境・ふるさとを考える
山口県地球人会議　事務局

〒753-0079 山口県山口市糸米2丁目13番35号 水土里ネット山口 山口県土地改良事業団体連合会内
TEL:083-933-0033　FAX:083-933-0048　URL:http://www.yamadoren.or.jp/

この用紙には、再生紙を使用しています。　印刷インキは、環境にやさしい植物性油インキを使用しています。　平成27年発行　印刷：株式会社コア